

人は生き残れるのか（その二 人口増加）

松浦 俊博

変動する環境下で生物が生き残るためには、長期的に個体を増やす必要がある。子供が環境の影響を大きく受けて「多死」する場合は「多産」でなければ存続できない。影響を受けにくく「少死」の場合は子孫を安定的に残せるので「少産」に落ち着く。多くの植物や魚類は前者であり、大型哺乳類は後者である。

人の場合はどうか。世界の人口は増え続けて、二〇二二年には八〇億人を超えた。地球上で食糧を供給できる最大人口は七〇億人と言われている（注一）。十分な食料がなければ人は餓死するが、食料が不足する過程では格差から生じる戦争が起きるだろ。

人が生き残るためには、国の環境により、発展途上国に見られる多産多死型に向かう場合もあれば、先進国に見られる少産少死型に向かう場合もある。しかし、環境が強制的に変えられたらバランスは崩れる。途上国では先進国からの援助で医療が整備されると幼児死亡率が低くなるが、多産傾向は続いてしまう。死亡率が低くなれば、少産にならなければバランスが崩れるのに、その対応には時間遅れがある。

そのため途上国では人口が急増し、一人当たりの資産が減り、困窮者が増える。これに伴い社会不安が増大して内乱などが生じる。ユニセフの人道援助プログラムは善行のように見えるが、本来は少産対策を同時に施さねばならないのに、そちらはほったらかしだ。人口は環境に適合した、自然の摂理ともいべきバランスのとれた状態に落ち着くべきだ。

人のサイズはどうか。小さいほど必要な食料は少なくて済むので、多くの個体が共存できるだろう。この点で日本人は欧米人より有利だ。

食料の種類についても、牛肉など生産に多くのエネルギーを要する食料を食べるのは不利で、魚や昆虫を食べるのが有利だ。麦をパンなどに加工しないで直接食べたり、家畜用飼料を人が食べれば省エネにつながる。

世代交代期間はどうか。高齢者の増加は若い世代の活力を奪っているようにも見える。高度な医療処置などで強制的に長生きさせることなく、自然の摂理に適合したバランスを目標にするべきだろう。

次は、環境に合わせて人は形や機能を変えていけるのかを考えてみたい。

参考文献 「強いものは生き残れない」吉村仁、新潮社、2009

注一。 世界人口七〇億人を突破 地球はどれだけの人口を養えるのか

エネルギー・文化研究所（大阪ガスグループ）2012